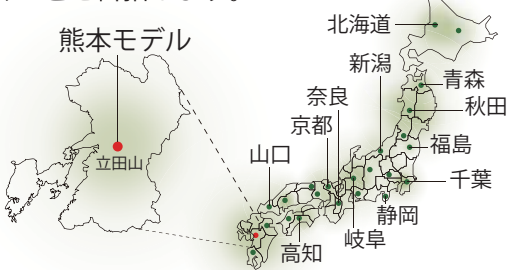




立田山と呼応する屋根

■設計主旨：公衆トイレを情報発信のインフラとして捉え、日本独自の伝統技術「檜皮葺(ひわだぶき)」を用いた建築により、熊本県の木材活用の幅を広げると共に、日本の伝統技術を継承します。

□ 公衆トイレ=日本の伝統技術を発信するインフラ
公衆トイレは無数に点在する小さな公共建築であり、群として捉えると日本全国に大きな影響を与えることができる「情報発信機能をもつインフラ」と考えられます。公衆トイレ(=情報発信のインフラ)を日本の伝統技術を用いて建設するケーススタディ(=熊本モデル)を提案します。この設計モデルを全国に波及し、日本文化を継承していくことを目指します。



公衆トイレ × 伝統技術モデルの波及イメージ

□ 熊本県産木材「檜」を、日本の伝統技術「檜皮葺」に活かす
熊本県は全国トップレベルの檜生産量を誇ります。特に阿蘇郡や球磨郡では、檜皮葺に用いる樹齢80年以上の檜が多くみられます。檜皮の採取は現在盛んではないですが、全国的に見ても貴重な資源として、檜皮を計画的に多く採取できるポテンシャルがあります。かつて阿蘇神社でも使われていた、日本独自の屋根葺工法「檜皮葺」を用いて、熊本県の豊かな木が持つ魅力を最大限表現します。



檜の森 檜皮葺

□ 檜皮葺の魅力を、自然と呼応する自由な造形で伝える
檜皮葺は、優美な曲線を自由に描いた造形が可能な工法です。その特性を活かした表現であり社寺建築の屋根に見られる「そり」「むくり」には、日本人の自然に対する精神性(=自然と一体になる心)が根源にあります。立田山の豊かな自然と、呼応する造形を実現しながら、日本の精神や伝統技術の魅力を伝える建築を目指します。



自由な造形が特徴的な檜皮葺

□ 熊本から全国へ檜皮葺の材料を供給する
本計画を起爆剤とし、熊本県から全国各地へ檜皮葺の材料を供給する木材流通ルートを開拓・促進します。檜皮葺の建築は減少傾向にあり、その要因の一つとして材料(檜皮)の入手難があげられます。檜皮は、高樹齢の檜からむいて採取する厚い樹皮であり、10年ほどのサイクルで再生する樹皮を採取できるエコな材料です。熊本県から檜皮を供給していくことで、日本全国の伝統技術を支えることができると考えています。



STEP1: リサーチ STEP2: 採取 STEP3: 供給

□ ワークショップによる伝統技術の継承
本計画の建設にあたり、母屋(=公衆トイレ)と対にあたる「東屋の檜皮葺屋根」を、ワークショップ方式にてつくります。原皮師による檜皮の採取・整形や、檜皮葺師による檜皮葺の見学+指導体験により、熊本の豊かな木資源や林業、伝統技術への理解を深め、技術継承の課題である後継者不足への貢献も視野にいたした計画とします。

設計 / 施工 意匠、構造、設備、植栽、県内建築士事務所、施工会社	技術 / 林業 檜皮葺師、原皮師、社寺技術保存会、林業従事者
地域 地域住民、森林所有者、観光客、周辺施設	行政 熊本市 / 県各部署
産業 / 研究 民間企業、大学 / 専門学校	

【体制イメージ】



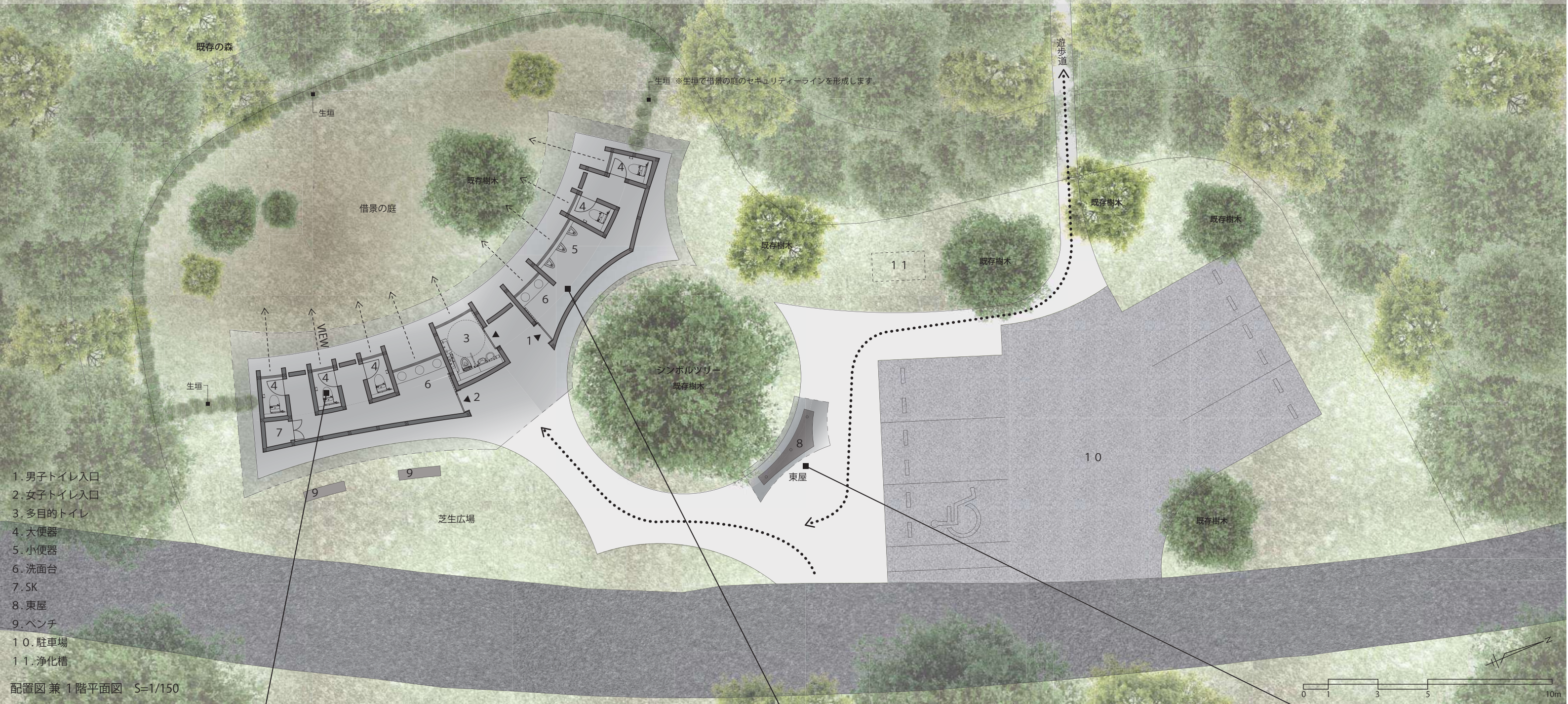
□ 配置及び平面計画

建物は、既存樹木の間をすり抜けるように緩やかな曲線を描きながら、敷地南側に配棟しています。

建物西側に生垣で囲まれた借景の庭をつくり、そこに向かうようにトイレ及び洗面スペースを配置しガラス貼りの開口部を設けることで、**トイレの中から立田山の自然豊かな風景を望むことができる空間構成**としています。

アプローチ通路や駐車場は、**建物同様に緩やかな曲線を描きながら既存樹木をよけて配置し、お祭り広場や遊歩道と自然につながるような動線計画**としています。

また敷地中心に植わっている大きな既存樹木(=シンボルツリー)を、円形に囲むように「建物(=母屋)」と「東屋」配置し、**建物と既存樹木が強い関係性をもたせながら空間を演出**しています。**東屋の檜皮葺屋根は、ワークショップで製作**します。



1. 男子トイレ入口
2. 女子トイレ入口
3. 多目的トイレ
4. 大便器
5. 小便器
6. 洗面台
7. SK
8. 東屋
9. ベンチ
10. 駐車場
11. 浄化槽

配置図 兼 1階平面図 S=1/150

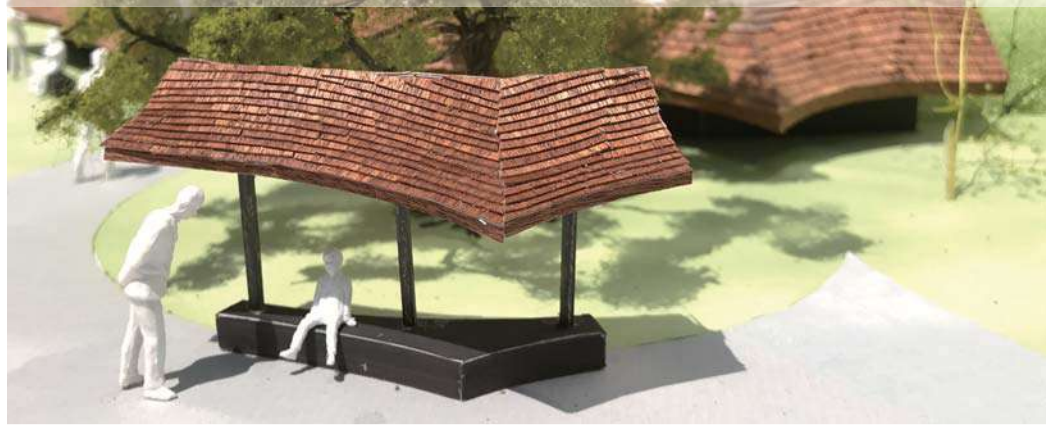
トイレブース内観 CG パース：
 トイレブース前面(=借景の庭側)をガラス貼りにしています。
 小さな空間から大きな自然を感じることができます。自然豊かな立田山ならではのトイレを演出します。



洗面台 + 小便器 CG パース：
 トイレブース同様に前面(=借景の庭側)をガラス貼りにしています。
 どこにいても立田山の自然が主役となるような空間をつくります。

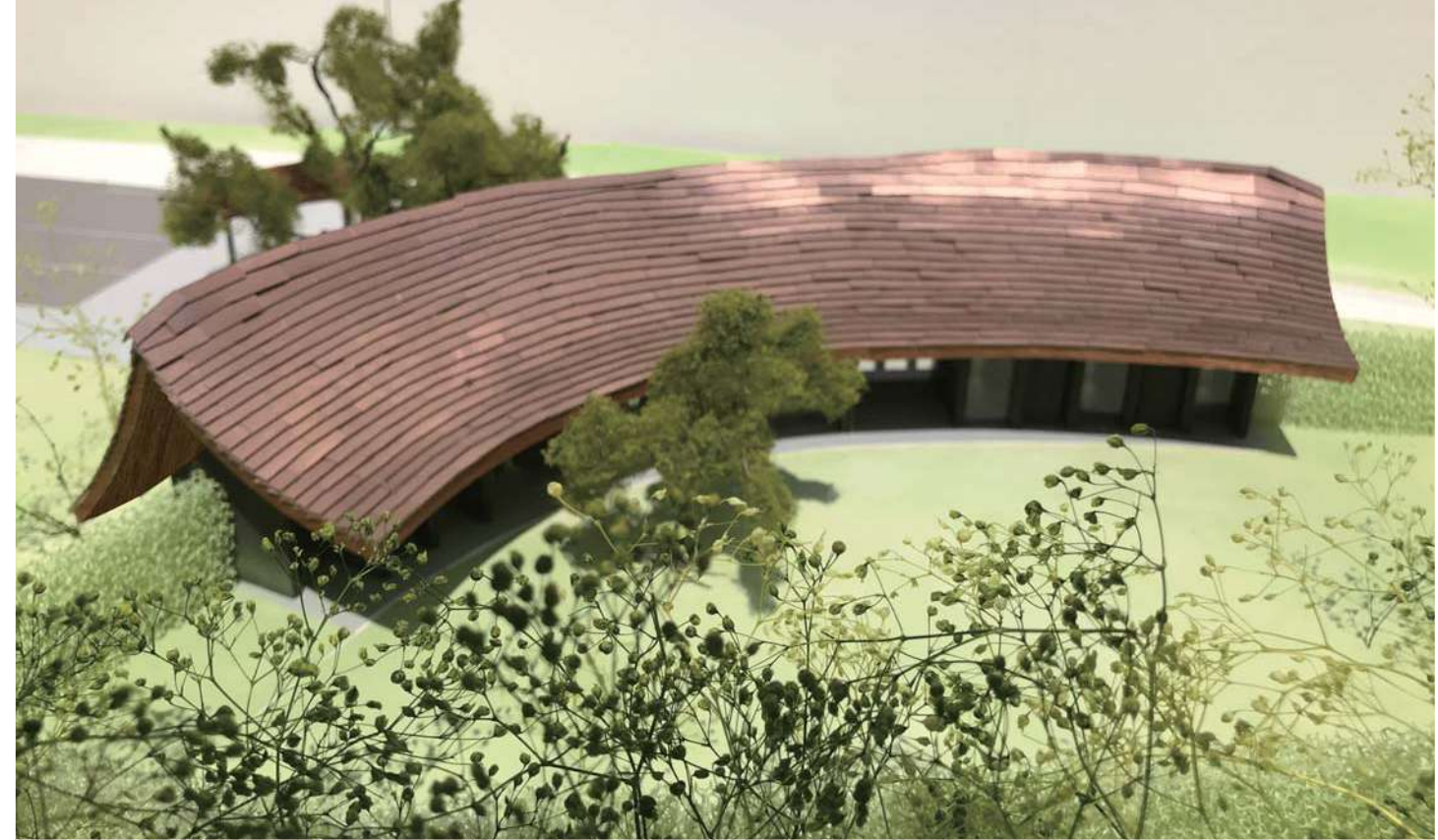


ワークショップでつくる東屋の檜皮葺屋根：
 東屋の檜皮葺屋根をワークショップでつくります。由緒ある社寺建築の檜皮葺をワークショップでつくることは本来ハードルが高いですが、本プロジェクトのように公共性が高く小規模な建築の外構であれば、実験的にワークショップを行うことが可能だと考えています。ワークショップを行うことで、檜皮葺の魅力を伝え、後継者及び理解者の増加を目指します。





建物東側（お祭り広場側）外観：エントランスは、唐破風を想起させる形状とし、シンボリックで認識しやすいデザインとしています。



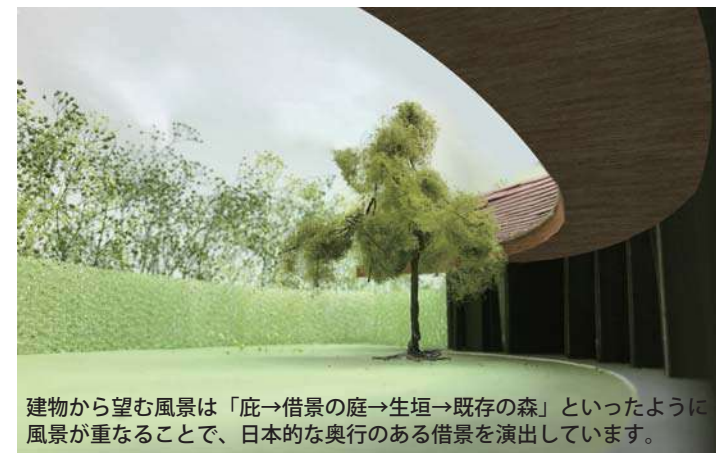
建物西側（既存の森側）外観：放射状に並んだ壁と、その間の開放的なガラス貼りの開口部により、借景の庭へと視線が広がります。



軒を低くすることで、檜皮葺の屋根を間近で見ることができます。



シンボルツリー（既存樹木）を囲むように、母屋と東屋を配置しています。



建物から望む風景は「庇→借景の庭→生垣→既存の森」といったように風景が重なることで、日本的な奥行のある借景を演出しています。



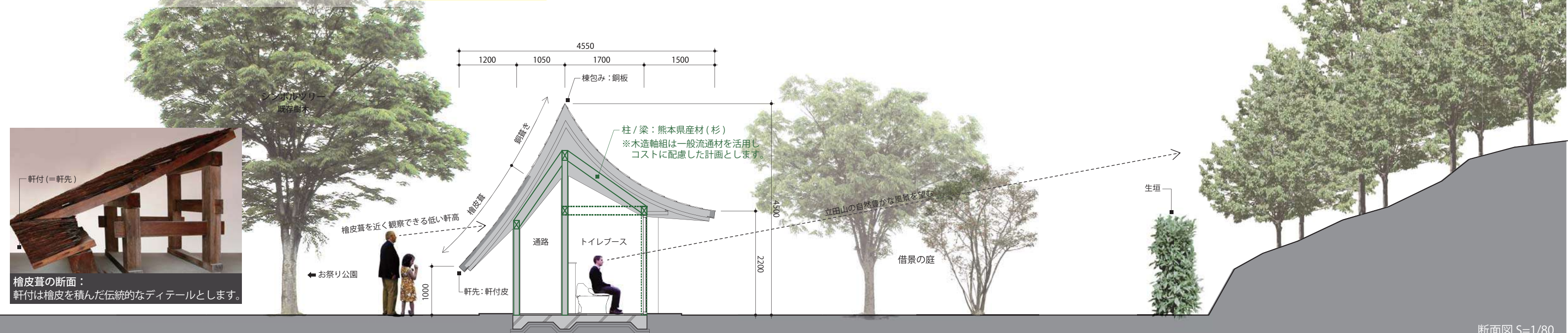
既存の森を受け止めるように緩やかに弧を描いた屋根が自然との繋がりを感じさせます。

□ 断面計画

建物東側（＝お祭り公園側）は、軒の高さを地面から1mと低くすることで、檜皮葺の屋根の存在を感じさせ、より近くで見ることができるようにし、檜皮葺の魅力を伝えます。

建物西側（＝既存の森側）は、東側とは対比的に開放的なガラス貼りの開口部を設け、トイレ及び洗面スペースから借景の庭越しに既存の森の風景（＝立田山の風景）を望むことができます。

柱／梁、屋根下地、外装壁面、軒天、内装壁／天井仕上及び下地は、熊本県産木材（杉）を採用します。



□ 檜皮葺と銅板葺の融合

屋根材には「檜皮葺」と「銅葺き」の2種類の材料を使用しています。植物性と金属製の異種素材を組み合わせることで、各々がもつ素材の魅力を対比的に表現することを意図しています。檜皮葺は苔が生え、銅葺きは緑青色に変化します。時の流れと共に自然と建築が一体化されます。また、檜皮葺をはじめ伝統技術はコストが高いことが一般建築で採用しにくい理由の一つです。屋根全体でなく、**範囲を絞って檜皮葺をデザインすることで、コストバランスをとりながら伝統技術を取り入れる一例を示すこと**も意図しています。



□ 唐破風を想起させるエントランスの造形

エントランス(=トイレ出入口)は、**唐破風を想起させる形状**とすることで、**シンボリックで認識しやすいデザイン**にしています。また複雑な曲線美の造形**つくりることが可能な檜皮葺の技術力の高さを表現し、魅力を伝えることを意図**しています。



□ 立面計画

お祭り広場側から見た外観は、**屋根だけが浮いているような風景**となります。**自然と呼応する造形と素材の屋根が立田山の自然と一体的な風景をつくり**ます。

